



用途に従うスタイル

畳表といえどももちろん「イグサ」となりますが、今では一概に「イグサ」とも言えなくなってきました。

イグサの代わりとして徐々にシエアラを広げているのが「和紙」と「ポリプロピレン」で作られた畳表です。これらは業界ではもう当たり前の商品として認知されていますが、一般の方ではまだまだ浸透していません。

このイグサ以外で作られた畳表は現代の高気密住宅や薄い床で作られる畳にはピッタリの素材です。高気密住宅や薄い床にイグサ畳表を使うとカビ発生の可能性が高くなってしまいうからです。

住宅の様式・用途に応じて畳も進化しています。
用途に応じたスタイルの畳を選ぶことが肝要ですね。



「和紙表」サンプル



watch the construction site

施工現場より

富山県高岡市のお宅にて畳入れ替えとフロアリング施工を行わせていただきました。

元は二間続きの座敷でしたが、座敷としてのご利用機会が減ったことから一間をフロアリングとさせていただきます。

床がキレイになると空間全体が明るい印象になります。人も家もおしゃれは足元からということでしょうか？



写真 施工後

都市思慮

島津良樹

What is the city?

「小鳥がうるさくはない」



30年近く前、開発間もない多摩丘陵の新興住宅地に住んでいた。田畑山林を大造成して宅地に作り変え街路樹も公園の木も新しく植樹したのだが、住み始めて十年間ぐらいは真夏でも蝉の鳴き声を聞かなかった。ようやく桜が根付きメジロが蜜を吸いに来るようになってから樹木と小動物や昆虫の共存が元に戻った。あの頃はひよつとしたら蚊もいなかったのではなかったか。

今の我が家のバルコニーの真ん前に隣家の避雷針用ポールが立っている。ここにいろんな小鳥が来てとまる。ハト、スズメ、カラスはもとよりヒヨドリ、

ムクドリ、シジュウガラ、オナガ、メジロ・・・隣の敷では早春にウグイスの幼いさえずりも聞かれる。何年前か前、ホオジロの大群が一冬を過ごしていったし、ついこないだはなんとチョウゲンボウがしばらくポールの天辺で休んでいた。

この辺りは大正の大震災直後に耕地整理された東京の山の手郊外のほぼ南端である。私鉄電車もそのころ開通した。それでもまだ百年は経っていない。時々散歩の足が向く近所の大きな緑地帯は洗足池や池上本門寺、いくつかの八幡様の鎮守の森。それと丸子川に沿って北西に続く国分寺崖線（こくぶんじがいせん）や等々力（とどろき）緑地の緑がある。もちろんメンテナンスには人工の手が入っているとはいえ多摩丘陵のニュータウンとはかなり趣が違っている。緑が環境として生活空間になじみ込んでいるのだ。最近聞いた話では都市河川の呑川（のみがわ）の三面張りですら野鳥の営巣場所になっていると言う。

都市の緑はある程度面的な広がりがないと環境効果が出ないと思う。都市計画の近隣公園規模では野鳥たちに多様な生存空間を与えるまでにはならない。右に挙げた緑地帯は歴史的な名所旧跡を核としたいわば「聖地」であり、都市計画により産み出された近代的公園ではなかった。しかし都内山の手近郊の大規模公園緑地には過去の遺産の転用事例が多いことも事実である。今後、都市計画の知恵で野鳥の住処となる新しい大きな緑地を造成することはいかに可能だろうか。

しまづ・よしき / 都市アナリスト。京都大学に学び西山卯三に師事。東急総合研究所取締役地域開発研究部長・顧問を経て、立教大学大学院教授。08年よりS&Associatesを主宰。